

仕事人秘録

かまぼこの老舗メーカ
一、鈴廣かまぼこ(神奈川県小田原市)。鈴木悌介副社長(62)は社長である兄と共に会社を経営する傍ら、全国の中小企業経営者で構成する「エネルギーから経済を考える経営者ネットワーク会議」(エネ経会議)の代表理事も務める。太陽光発電などエネルギーを地産地消できれば、地方経済がよみがえり、中小企業が元気になると説き続けてきた。

鈴廣が創業150年を迎えた2015年、3階建ての新社を造りました。エネルギーに徹底的にこだわりました。同じ規模の建物よりエネルギー消費量を約6割減らしました。自然光を最大限取り入れる構造にして、全館を発光ダイオード(LED)照明にしました。壁は高断熱にして、床や天井は地元のヒノキを使用しました。

使うエネルギーにもこだわりました。一番の特長は井戸水の活用です。井戸水は年間通じて温度がほぼ一定で、冬は外気より温かく、夏は冷たい。この温度差を使って空調や給湯の熱源にしました。

かまぼこ作りに水は欠かせません。小田原でかまぼこ産業が栄えたのは、山の栄養を含んだ地下水が豊富なことが大きいのです。

再生エネの伝道師 ①

地産地消で地域再生

鈴廣かまぼこ副社長

鈴木悌介氏



すずき・ていすけ 鈴廣の創業家次男として米国で練り製品会社を経営した後、家業の経営に参画。1996年より現職。小田原箱根商工会議所会頭やエネ経会議代表理事も務める。神奈川県小田原市出身。上智大学経済学部卒。

どうしても必要な電気は地元の新電力や湘南電力(同)から全量購入しています。東京電力ホールディングスから切り替えました。湘南電力は地元の大規模太陽光発電所(メガソーラー)の電気を使うなどエネルギーの地産地消を重視する会社で、立ち上げ時は私も協力しました。

無駄な電気を使わない徹底した省エネに、必要なエネルギーは地元で賄うことが、これからのエネルギーのあり方だと主張し続けてきた。

「なぜ、かまぼこ屋のおやじがエネルギーにこだわるのか」とよく聞かれます。地球温暖化防止のためにこんなに一生懸命取り組むのかと。私がこだわるのは、環境問題以上に地域経済に大きな意味があるからなのです。

日本の化石燃料の輸入額は一時、年間25兆円規模であっ



2015年に建設した新本社は、徹底した省エネで消費エネルギーを6割減らした

たと聞きます。電気などエネルギーを賄うために、毎年この国に流れています。小田原市に落とし込めば、毎年300億円がエネルギー費用として市外に出ているのです。中東の砂漠に乱立する超高層ビルには、我々が払う電気代が貢獻している。一方で、日本の地方経済は疲弊するばかり。国は地域再生を掲げていますが、具体策といえば観光振

興策と定住人口増加策ばかりです。いずれも大切なテーマですが、人口が減る日本では両方とも地域間でパイを奪い合う競争になります。でも海外に出ていくエネルギー費用を地域に回すならば、地域間で市場を取り合うことになりません。

商売が一番難しいことは、需要をつくることです。でもこのエネルギーの仕組みは費用の払い先を海外から地元に変えるだけ。新たな需要をつくるより簡単ではありません。エネルギーは一番効果的な地域創生策だと私は思っています。

東日本大震災後の12年、エネルギーで地域を再生させる目的でエネ経会議を立ち上げました。参加社数は約400社となり設立時の3倍以上に増えました。

原子力や石炭火力発電など国のエネルギー政策見直しは時間がかかる。ならば地域に愛着のある中小企業経営者の草の根運動として、エネルギーから地域を活性化させよう。同じ思いを抱く経営者が全国に広がっている手応えは感じています。その思いをどう現実の取り組みにつなげるか。そのロールモデルとして、我が社や小田原の取り組みを参考にしてほしいと思っています。

これからお話しする私の歩みや鈴廣の歴史も、今のエネルギーに関する活動につながっているのです。

榊原健が担当します。